

コチョウラン栽培 障害者自立へ一役

「相応の収入」 ■ 働く喜び

3日は国際障害者デー。日本では、農業と障害者福祉を組み合わせた「農福連携」で、高価なコチョウランを栽培する取り組みが広がっている。障害者は相応の収入が得られ、企業にとっては障害者雇用率も上げられるメリットがあるようだ。（福島憲佑）

白い花が鈴なりにになった鉢植えのコチョウランが、千葉県富津市の郊外にある温室にずらりと並ぶ。温室の中は生育に適した室温25～30度、湿度20～30%に保たれ、冬は暖かく感じる。

温室はNPO法人「アロンアロン」が運営する就労継続支援B型事業所だ。B型事業所は、障害者が職員の支援を受けながら働いたり、企業への就職に向けて仕事を覚えたりする施設。温室では10人余りの知的障害者らが働いている。

水やりをしたり、脇芽を間引いたり。鉢に支柱を立て、花の姿を見栄え良く整えるのも大事な仕事だ。覚えることが得意ではない障害者も働きやすいように、作業は細分化されている。

同NPOは贈答用の需要が高いコチョウランに着目。2017年から栽培を始めた、約2000の取引先に販売する。価格は株の数などで異なり、中心価格は2万～5万円（税抜き）。

崇之さんは「障害者が働く場はこれまで簡単な事務作業が多かったが、こうした仕事はいずれAI（人工知能）に代わられるかもしれない。農業分野の仕事を広げていきたい」と意気込む。

「農福連携」に企業も参入

企業もコチョウラン栽培に注目する。イオン銀行と、コールセンター大手「ベルシステム24」の特例子会社「ベル・ソレイユ」は、いずれも18年に栽培事業に乗り出した。同NPOで働いていた障害者を雇用し、同NPOに出向してもらうという格好で栽培している。両社とも、取引先へ贈る花を自前で確保するとともに、障害者雇用率の上昇にもつながっている。

帝人の特例子会社「帝人ソレイユ」は4月、約5000万円かけて千葉県我孫子市に温室を建設。10月に本格的な出荷を開始した。年間4000鉢を栽培する目標で、育てたコチョウランは企業を中心に販売されている。

那部さんは「販路を拡大して障害者の働く機会を増やしたい」と語る。



花の姿を整える男性。「作業スピードや正確性を高めたい」とやりがいを感じている（千葉県我孫子市）

知的障害がある男性(22)も、イオン銀行に就職し、同NPOに出向して作業に取り組み一人だ。「優しく教えてくれるので頑張れる」

精神障害がある男性(42)は就労移行支援事業所で仕事をしていたが、事業所の紹介で同社に入社。農業の仕事は初めてだったが、「のびのびと働ける。コチョウランを育てるのは奥が深く、もっと勉強したい」と、やりがいを感じている。同社農業事業部長の鈴木